「Die Brücke 架け橋」第730号 令和５年６月１日発行（隔月刊）公益財団法人日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌

2023 6

表紙の言葉

ドコミは、2009年に独日協会アム・ニーダーラインの熱心な若いメンバーによって始まった日本のポップカルチャー・コンベンションです。当初は週末に300人程度で開催予定だったこの集まりは、急速に拡大し、2011年にデュッセルドルフ市の紹介により、CCD（Congress Center Düsseldorf）とメッセ・デュッセルドルフに場所を移して開催されました。2017年には、Andreas Degen氏とBenjamin Schulte氏によってAkibaDreams GmbHが設立されました。2019年には、週末にかけて55,000人以上の人々が、特にアニメ、マンガ、コスプレ、音楽、ゲームの分野での情報収集や意見交換を目的にこのイベントを訪れました。2020年と2021年には、パンデミックの影響により、DoKomiは衛生管理の下、2倍の面積の会場に27,000人の来場者を迎え開催されました。2023年には、初めて6月30日から7月1日までの3日間に及び開催され、来場者数は140,000人を突破する予定です。

このイベントは、主にボランティアによって支えられています。彼らは新しいコンセプトを生み出し、実行に移す存在でもあります。DoKomiの主な目標のひとつは、多くのファンプロジェクトに発表の機会とプラットフォームを提供して、このコミュニティの創造的で生産的な可能性をサポートすることです。一方、この若者文化から関連する産業が生まれています。日本のポップカルチャーは、クリエイティブ産業、輸出入、印刷・デジタルメディア、そして何よりもイベント産業などの独立した事業展開を可能にしました。これらは日独の経済交流において、ますます重要な意味を持つようになると予測されます。

マイト　ピア智子（独日協会アム･ニーダーライン会長）

Zum Titelbild

Die DoKomi ist eine japanische Popkultur Convention, die 2009 von engagierten jungen Mitgliedern der Deutsch-Japanischen Gesellschaft am Niederrhein e.V. ins Leben gerufen wurde. Ursprünglich für ca. 300 Personen über ein Wochenende geplant, wuchs sie schnell, sodass im Jahre 2011 durch Vermittlung der Stadt Düsseldorf ein Wechsel zum CCD und der Messe Düsseldorf stattfinden konnte. 2017 wurde die Organisation mit der Gründung der AkibaDreams GmbH durch Herrn Andreas Degen und Herrn Benjamin Schulte auf rechtlich solide Beine gestellt. 2019 kamen über das Wochenende über 55.000 Menschen, um sich vor allem in den Bereichen Anime, Manga, Cosplay, Musik und Gaming zu informieren und auszutauschen. 2020 und 2021 fand die DoKomi wegen der Pandemie mit einem Hygienekonzept auf einer doppelt so großen Fläche für 27.000 Besucher statt. 2023 wird sie nun erstmals über drei Tage vom 30.6. bis 1.7.2023 stattfinden und wahrscheinlich die 140.000 Besuchermarke durchbrechen.

Die Durchführung wird vor allem durch ehrenamtliche Helfer getragen, die für Verpflegung und Unterkunft die Umsetzung der Messe sicherstellen. Sie sind es auch, die häufig neue Konzepte anregen und umsetzen. Ein Hauptziel der DoKomi ist die Unterstützung des kreativen und produktiven Potentials dieser Community, u.a. ermöglicht sie vielen Fanprojekten sich zu präsentieren und eine Plattform zu bekommen. Mittlerweile hat sich aus dieser Jugendkultur auch ein relevanter Wirtschaftszweig entwickelt. Die japanische Popkultur hat eigenständige Bereiche in der Kreativwirtschaft, im Import/Export, in gedruckten und digitalen Medien, sowie nicht zuletzt auch in der Veranstaltungsbranche ermöglicht. Diese werden zunehmend im deutsch-japanischen Wirtschaftsaustausch an Relevanz gewinnen.

Pia-Tomoko Meid
(Präsidentin der Deutsche-Japanischen Gesellschaft am Niederrhein e. V.)

目　次　　ページ／Seite　　INHALT

巻頭言	八木 毅	2	**Vorwort**	Takeshi Yagi
4月の協会活動報告			**JDG-Aktivitäten im April**	
2023年 全国日独協会連合会年次総会レポート / 柚岡 一明 / **文化の玉手箱１：俳句集「Gyūdon und Spätzle 牛丼とシュペッツレ」** 大久保 明		4	**Bericht zur Verbandstagung der Japanisch-Deutschen Gesellschaften 2023 /** Kazuaki Yuoka / **Kulturkiste 1: Haiku-Sammlung „Gyūdon und Spätzle“** Akira Okubo	
ベルリナー・ルフト	キルステン・ホーアイゼル	6	**Berliner Luft**	Kirsten Hoheisel
私とドイツ	嶋田 吉朗	7	**Deutschland und ich**	Kichiro Shimada
You はなぜ日本語教師に？「教える」決断のきっかけ / 緒方 ユリアン / **文化の玉手箱２：「タイパ」の時代と豊かさと―ミヒャエル・エンデ『モモ』出版50周年に寄せて** 田中 洋		8	**Nach Selbstreflexion: ”Warum nicht Japanisch Unterrichten?“/** Julian Ogata / **Kulturkiste 2: Zufriedenheit im Zeitalter der ‚Effizienz‘ Zum 50. Jubiläum von Michael Endes „Momo“** Hiroshi Tanaka	
日本の中の「ドイツ」を探すアプリ―JG Map! のご紹介	小野 竜史	10	**Neue App für Deutschland-Liebhaberinnen und Liebhaber in Japan：JG-Map!**	Tatsuhito Ono
「若者はなぜドイツ語を学ぶのか」ドイツ語専攻の学友に聞く、ドイツを選んだ理由	星野 圭音	11	**Warum studieren Jugendliche Deutsch? - Gründe für Deutsch als Hauptfach an der Universität**	Tamane Hoshino
ドイツ経済の動き 第81回	伊﨑 捷治	12	**Tendenz der deutschen Wirtschaft (81)**	Shoji Isaki
イチオシ！わたしのドイツ / **お知らせ**	相澤 凌平	13	**Mein Schatz, Deutschland /** **Informationen**	Ryohei Aizawa

ドイツのロシア政策は誤りだったのか……シュタインマイヤーとメルケルの対比

八木 毅（日独協会副会長）

ロシアのウクライナ侵攻は世界に大きな衝撃を与え、ドイツも外交・安全保障政策、エネルギー政策の大転換を余儀なくされた。侵攻から3日後の昨年2月27日、ショルツ首相が連邦議会の演説で「時代の転換（Zeitenwende）」を表明したことは日本でもよく知られている。ロシアとの関係では、ドイツはG7、EUの枠組みで厳しい政策に踏み切り、ロシアのエネルギー資源（特に天然ガス）への依存脱却、その象徴として天然ガス・パイプライン「ノルト・ストリーム2」（NS2）の稼働停止に舵を切った。こうした政策転換にもかかわらず、ドイツはこれまでのロシア政策を巡ってウクライナや東欧・バルト諸国から厳しい批判に晒されている。例えばゼレンスキー大統領はブチャでの残虐行為が明らかになった後、「メルケル前首相とサルコジ元大統領にブチャに来てもらって、彼らのロシアに対する譲歩が何をもたらしたかを自分の目で見てもらいたい」と述べたし、また、昨年3月17日のドイツ連邦議会での演説でも、「我々は、『NS2は武器であり、戦争の準備だ』と言ったが、ドイツは『NS2は経済、経済、経済である』と答えた」と、他国での演説とは打って変わって厳しいトーンでドイツを批判した。

ドイツ国内でもこれまでのロシア政策の総括は不可避となり、中でも主要政治家の対応に注目が集まったが、最初に誤りを認めたのはシュタインマイヤー大統領であった。彼はシュレーダー政権の首相府長官、メルケル政権の外相を務めた後、2017年に連邦大統領に就任したが、外相時代の2016年にNATOが東欧で演習を行った際には、「サーベルをガチャつかせたり、戦争の雄叫びを上げたりすることで事態を過熱させるべきでない」と発言し、また、NS2についても一昨年、大統領としてのインタビューで、「エネルギー関係はロシアと欧州との最後の架け橋であり、双方とも、この架け橋を本当に壊していいのか考えるべきである」と述べて擁護していた。しかし、昨年4月4日には、「私がNS2を支持し続けたことは明らかに間違いであった。我々は、ロシアがもはや当てにしていない架け橋、そして、我々のパートナーが警告した架け橋に固執してきた」「私は、プーチンが帝国主義的狂気のためにロシアの完全な経済的、政治的、道徳的破壊を甘受することはないと見ていたが、間違っていた」と述べ、ほぼ全面的に過去のロシア政策の誤りを認めた。

大統領以外にロシア政策についての説明を求められるのは16年間在任したメルケル前首相である。メルケルは退任後、公の場での発言を控え、色々な批判にも反論しなかったが、内外の批判の高まりや問題の重要性を受けて、昨年6月7日、出版記念イベントでジャーナリストと1時間半にわたる質疑応答に応じた。ここでの発言はいかにもメルケルらしいものであり、少し長くなるが引用したい。「自分は災厄を防ぐべく努力した。仮に外交が成功しなくとも、だからと言って外交が間違いだということにはならない」「自分は『あれは間違っていた』と言うべき理由はないと考えるし、したがって、自分は謝ることもしない」「自分は振りかえって、『あのような出来事を防ぐために十分努力しなかった』と自分を批判しないでよいことをうれしく感じる」「貿易を通じたロシアとの関与がプーチンの行いを変えるとの幻想は一度も抱いたことはない。自分はナイーブではなかった」等々。一連の発言に対する反応には厳しいものが多く、「（イベントでは）メルケルに対する厳しい質問がなかった。例えば、なぜクリミア併合後もNS2建設に固執したのか（筆者注：メルケルは任期終盤まで、「純粋に民間の経済案件」と言い続けていた）、あるいは在任中にロシアへのエネルギー依存が大幅に高まったことをどう考えるか、である」（Frankfurter Allgemeine Zeitung 論説）、「メルケルの少しだけの後悔」（Wall Street Journal）と指摘されている。実は今回の質疑応答は敵対的な質問、厳しい「二の矢」「三の矢」が飛んでこないように前もってアレンジされたものであり、メルケル自身、退任後は「心地よい行事にしか出ない」と認めている。それにしても、メルケルというのは簡単には誤りを認めない政治家である。首相在任中の難民危機についても、メルケルが口にした最大限の「反省」の言葉は「こういうことが繰り返されてはならない」というものであった。改めてメルケルというのは大変粘り腰で、したたかな人物であると感じた。

いずれにしても、これまでのロシア政策を巡る議論が今後も続くことは確実であり、これは、4月17日にシュタインマイヤー大統領がメルケル前首相に「特装大十字章」という特別の勲章（過去にアデナウアー元首相、コール元首相が授与された）を授与した時も、ロシア政策を巡って両者が批判に晒されている中での叙勲は不適当あるいは時期尚早であるとの反応がすぐさま出たことにも現れている。

レポート

ドイツ語圏文化セミナー 154　～ブドウ畑から Zum Wohl! ドイツ・ビオワインの世界へようこそ～

4/9㈰ 15:00~17:30　日独協会事務所内セミナールーム

Wein Seminare & Verkostungen "Willkommen in der Welt des deutschen Bioweins!"

Datum: So., 9. 4. 23, 15.00-17.30 / Ort: Seminarraum der JDG

榊原 景子（日独協会ドイツ語講座受講生）

うららかな春の日曜日、ドイツワインイベントが開催されました。ドイツ南西部 Baden で 50 年に渡りビオワインを作り続けているイゼレワイナリーの Bertram さん & 美香さんご夫妻とオンラインで繋がり、ご夫妻と親交の深い久保田由希さんの進行でお話を伺いました。

まずはワイン作りについて。ワイナリーがある Kaiserstuhl は、ワインで名高い地区の 1 つでもあり、様々な野鳥や珍しい小動物が生息する環境保護地域でもあるそう。イゼレワインのエチケットには Bienenfresser という色鮮やかな野鳥が描かれています。イゼレさんは、有機農法の中でも特に厳格な基準を持つデメター農法で葡萄を栽培していて、畑作業の動画や写真を交えたお話から、生態系の一員として自然と調和を図りながらワイン作りに取り組む様子が伝わってきました。

後半は日本未上陸のイゼレさんのワインを 4 種類いただきました。1 つ目はドイツ国内でも珍しい、Helios 種のフルーティな辛口白ワイン。2 つ目も白で、ミネラル感を重視して作られた力強い味わいの Weisser Burgunder 種。3 つ目はタンニンの柔らかな Spätburgunder 種の赤。4 つ目は南国フルーツの香りが広がる Solaris 種の甘口。甘口はアルコール度が低いものが多いですが、こちらは 14% もあり驚きました。どのワインも美味しく、試飲が進むにつれイゼレさんも会場の皆さんもすっかり雰囲気がほぐれ、参加者から「ドイツはビールだけでなくワインもこんなに美味しかったとは」とのお声も。今秋には今回と異なる種類のイゼレさんのワインが日本で販売されるそうで、楽しみです。

自然に育まれたドイツワインの魅力を堪能する貴重な機会となりました。現地時間の朝早くから解説してくださったイゼレさん、進行役の久保田さんや日独協会の皆様に感謝申し上げます。

ドイツ語講習会
2023 年度上半期コース
火～土曜日
Deutschkurse in der JDG
April 2023 - September 2023
jeden Di.-Sa.

ドイツ時事問題研究会 第 87 回
4/15㈯　15:00 ～ 17:00
Studiengruppe "Deutschland aktuell" (85)
Datum: Sa., 15. 4. 23, 15.00-17.00

当月のトピックスとしては、①連邦議会議席数を削減する連邦選挙法の可決、②専門職の移民手続きを簡素化する移民法案の閣議決定、③経済諮問委員会および主要経済研究所が今年の経済成長率を各 0.2% および 0.3% へ上方修正、④大幅な賃上げを求める公共機関労組が各地の交通機関でストライキ、⑤ドイツの要求で 2035 以降も EU における合成燃料車の販売が可能な方向へ、などの話題を取りあげ、参加者間で意見や補足説明を交わした。

「今月のテーマ」では、①新井さんから「対中政策の見直しを図る EU、ドイツ」と題して、機会をとらえて言うべきことは言うよう努めているが、対中資源依存の高さなどからくる難しさもある現状、②伊﨑から「冬を乗り越えたエネルギー政策と今後の課題」などについて報告、意見交換を行った。（伊﨑 捷治）

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）
4/15㈯　19:00 ～ 20:40
Sprachtreff

Datum: Sa., 15. 4. 23, 19.00-20.40

参加者約40名。4月から予定していた研修生の都合が悪くなり、Sprachtreffのドイツ人担当者がいなくなってしまいましたが、日本側の担当者の協会スタッフ芦野さんと、10月から研修が決まっているダヴィットさんがドイツから手伝ってくれることになり、4月も開催することができました。

今回の参加者からは「事前にメールでトークテーマについて知らせていただき、それを調べるだけでも勉強になった」「主に独学で学んできたので参加レベルに達しているかの判断ができずに、ずっとためらっていました。実際に参加して分かったことは、完璧なドイツ語や日本語が求められているのではなく、相手の話を遮らない、共感的に話を聴く態度や、メンバー全員が同じくらいの頻度で話し、誰もが満足して明日からの語学学習を頑張ろうとモチベーションを高めるための場だということです。」などの感想をいただきました。また、多くの方から、初級レベルのモデレーターの方への感謝が寄せられていました。毎回、ハプニングや参加者人数がそろわないなど、不測の事態も起きますが、反省点を次回開催に活かして続けていきたいと思います。

独逸塾

4/17㈪　19:00 ～ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 17. 4. 23, 19.00-21.00

参加者22名

１．テキストは2023年1月24日Tagesschauの「ドイツの反戦映画、西部戦線異状なし」

１）ドイツ映画界では久しぶりにアカデミー賞候補に9部門でノミネートされる。トップの候補は11部門でノミネートされた米国映画「Everything everywhere all at once」。結果は3月12日に発表される。

２．テキストは2023年2月18日シュピーゲル誌の新国防大臣ボリス・ピストリウスの国防政策についての対談記録「Ich bin ein Kind des kalten Kriegs（私は冷戦時代の申し子）」

１）就任直後ドイツ国防大臣に対しては失望感が先行。理由はウクライナへの戦車の引き渡しを回避するヨーロッパ諸国に対する態度、ドイツ国防軍の再編成に対する態度、ドイツがヨーロッパの中で指導的地位を占める問題への態度の３点。

２）ボリス・ピストリウスの反論

①戦車引き渡しの件：ドイツが14台ポルトガルが3台計17台のLeopard2A6の引き渡しを決定したが他の諸国は消極的であった。ドイツには事情があり、あまり多くを引き渡すと国内の訓練に支障が出る。また戦車の納品に2年から2年半かかる。

②ドイツ国防軍の再編成について：国防省のボンとベルリンに配置されている3,000人の職員は多すぎるが徐々に減らしていく。急激には行わない。265,000人の国防軍の適正配置を徐々に行いたい。

③ヨーロッパにおけるドイツの指導的立場について：アメリカへの国防の依存度を徐々に弱めたい。

ドイツ語の解釈Pararellwelten, vom Ende her等をめぐり活発な議論があった。（森永 成一郎）

会員懇談会サロン

「日本の大学におけるドイツ語教育の今」

4/17㈪　18:00 ～ 19:30

日独協会事務所内セミナールーム

Mitgliederstammtisch

„Deutsch als Fremdsprache an japanischen Universitäten heute.“

Datum: Mo., 17. 4. 23, 18.00-19.30

Ort: Seminarraum der JDG

スピーカー：前田 俊秀氏（㈱三修社 / ㈱ブレイン代表取締役社長）/ 菊池 暁氏（㈱三修社　副編集長）

参加者：19名

1991年以降、大学での第二外国語が必修単位でなくなり、徐々に選択科目化し始めたそうです。これによりドイツ語を選択する学生は10年前と比べ4割減少し、昨年は約72,000人とのことです。理科系学部でも英語化が進んでいるそうです。対照的に中国語、韓国語、スペイン語の履修者が増加。韓国語はK-POPの影響が大きいと。ドイツではアニメ、漫画、コスプレなどが人気で、日本に対する関心が高い。他方、日本では若者を引き付けるドイツの魅力が少なく、ドイツ語履修希望者を増やすきっかけに乏しいと。ドイツ関係の本を出版してきた老舗の三修社が扱う外国語は、現在47言語。最近ではロシア語、ウクライナ語の本を出版。外国語をキーワードに、グローバルコミュニケーションサポーターとして、様々なデジタルコンテンツビジネスや、イベント企画を積極的に展開中とのことです。三修社様の変容に大変驚かされる講演会でした。（木田 宏海）

※会場が書かれていないものはオンライン開催

3年振りに対面による全国日独協会連合会総会を開催

柚岡 一明（日独協会常務理事）

4月21日㈮に、3年振りに全国日独協会連合会総会が開催され、全国から25協会と、ドイツから独日協会連合会※1のマイヤー副会長とミュンヒ・ベルリン日独センター事務局長をお招きし、ドイツ大使館からはフィーツェ首席公使とグロートフーゼン文化課長が参加されました。東京の日独協会の会員も含めて全体で65名の会員が参加しました。

会議に先立って、昨年10月12日にご逝去されました連合会会長代行であり（公財）日独協会の副会長であった中根猛大使に対して、故人のご冥福を祈り1分間の黙祷を捧げました。

連合会の東原敏昭会長（日立製作所会長）やフィーツェ首席公使、ドイツからの2名の来賓の挨拶が行われた後、連合会に関する決議と報告が行われました。新しく連合会会長代行に八木毅大使（当協会副会長）が選出され、また令和4年度決算と令和5年度予算案が承認されました。

東原会長

その後、参加協会からそれぞれの活動の簡単な報告がありました。コロナ禍の中で思うような活動ができなかったという共通の悩みはあったものの、オンラインの活動の充実を図り、本の出版や新たなアプリのリリースなど、多くの協会が新たな方向を模索してユニークな事業を行っていることが披露され、参加者は熱心に聞き入っていました。

フィーツェ首席公使

独日協会連合会の活動と取り組み

お昼休憩をはさんだ後、午後の部はベルリン独日協会連合会のマイヤー副会長とミュンヒ理事によるプレゼンテーションで始まりました。独日協会では金沢宣言※2の「多様性」、「デジタル化（ネットワーキング）」、「持続可能性」という3つの指針にそって活動しているとの報告があり、加えて、宣言の5つの目標を簡潔にまとめて次のような報告がありました。

・共通のプラットフォームとネットワークを独日協会会員と日独協会会員の枠を超えて拡大する。
・技術的な可能性を活用する。
・若者の取り組みをサポートする。
・私たちの価値観、文化、利害関係について対話を続ける。
・両連合会の所属協会及び会員数を増やす。

発表に耳を傾ける参加者達

これらは日本でも「日独協会」という形態が今の時代に合ったものであるために、また、若い世代の方々にも受け入れられ、引き継がれていくためにも重要です。加えてミュンヒ事務局長より、金沢宣言の内容をフォローする会合として「パートナー会議2024」を来年秋にベルリンで開催する旨報告がありました。

左から、通訳の小野先生、マイヤー副会長、ミュンヒ事務局長

引き続き、ドイツ日本研究所のヴァルデンベルガー所長による基調講演「Zeitenwende（時代の転換）と日独関係」があり、総会は終了。

ヴァルデンベルガー所長

心温まる大使のもてなし

同日夜にはドイツ大使公邸でフォン・ゲェツェドイツ大使主催のレセプションが開催され、総会参加の皆様に心温まる歓待を頂きました。今回初めて参加した協会もあり、会場内では大使館の皆様との、あるいは各協会間での交流場面が多くみられ、非常に活況を呈しました。

左から柚岡常務理事、八木副会長、フォン・ゲッツェ大使

翌日の分科会では有志参加者30名によって「パートナー会議2024」について引き続き議論を深めました。マイヤー副会長とミュンヒ事務局長からは今回の日本側との議論の成果をまとめ、5月19日の独日協会連合会総会におけるドイツ側での議論を経て、今夏にはオンラインにて双方の関係者との意見交換を行いたいとの提案がありました。

また、総会前日の20日にOAGハウスのレストラン「Mahlzeit」にて前夜祭を開催し、参加者の交流を深めました。

大使公邸での集合写真

※１：ドイツ側の協会は独日協会、日本側の協会は日独協会と称しています。独日協会の数は約 50。
※２：2018 年に金沢で開催された日独協会連合会総会で発表された、日独交流活動における今後の指針。

資料①

2023年度全国日独協会連合会予算

【収入】		【支出】	
前期繰越運転資金	943,419	日独協会 2023年度分事務委託料	500,000
2023年度会費見込み 40協会	760,000	2023年度連合会記念事業積立金	50,000
		2023年度独日協会総会 参加旅費補助	100,000
		その他（慶弔電報等）	50,000
		交通費補助	50,000
		次期繰越運転資金	953,419
	1,703,419		1,703,419

資料②

2022年度全国日独協会連合会収支報告書

（2022年4月1日～ 2023年3月31日）

前期繰越運転資金	847,175		
		公財）日独協会令和４年度分事務委託料	500,000
2022年度会費納入額 40協会	760,000		
		2022年度独日協会総会 参加旅費一部補助 ※中根会長代行	39,863
		2022年度日独ユース ネットワークへの支援	0
		全国日独協会連合会主催講演会（会場費一部） ※会場費(公財)日独協会と折半	50,820
		2022年度連合会記念事業積立金	50,000
普通預金利息	7		
		出張旅費 ※茨城県日独文化協会35周年式典　柚岡 ※豊橋日独協会30周年式典 柚岡	20,990
		その他(ゆうちょ銀行手数料等)	2,090
		次期繰越運転資金	943,419
収入計	1,607,182	支出計	1,607,182

Die Kulturkiste
＝文化の玉手箱＝

書籍紹介①

俳句集「Gyūdon und Spätzle 牛丼とシュペッツレ」

大久保 明（日独協会監事）

日独外交関係樹立 160 周年記念に独日協会連合会は会員からの俳句の募集を行い、その作品集を刊行しました。4 月 21 日東京で行われた全国日独協会連合会総会に参加された独日協会連合会代表から各日独協会へ寄贈されました。この俳句集を紹介します。

2021 年 1 月 24 日はその 160 年前、日本とドイツ（プロイセン）の外交関係が樹立された記念すべき日でした。コロナの影響で記念行事が出来ず、残念な状況の中で会員のアイデアが寄せられました。それが、多くの仲間がこの日本独特の形式を愛し、自ら作品を生み出している俳句の募集でした。知識の有無にかかわらず応募してくれることを望んで、どれだけの応募があるか気を揉んでいたところ、結果は期待を大きく上回る 160 の作品の応募があり大成功でした。

この句集の表紙や挿絵は会員の方々の美しい墨絵の協力で作られています。（カラーでお見せ出来ないのが残念です）。俳句のテーマは、「日本とドイツ」「記念やお祝い」「友情」「ポップ・カルチャー」「食べ物」です。掲載されている作品の一部をご紹介します。俳句は日本語では５・７・５、それに季語が基本となっていますが、ドイツ語ではそのような決まりごとは無く、前述しておりますが、「日本独特の形式」、つまり「短い三行の詩文」ととらえて作られています。このような作品を翻訳するのは大変難しいことですので、ここではいくつかのドイツ語の俳句を私なりの解釈で紹介したいと思います。皆さんはそれぞれご自分の解釈でお読み下さい。

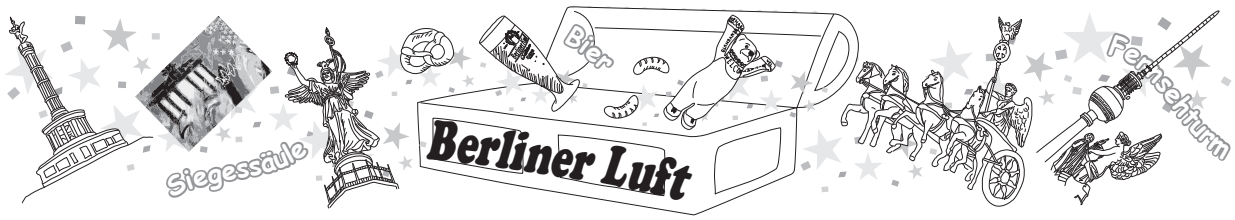
Nattou im Munde Geschmack der Erinnerung Fäden der Freundschaft　納豆の　粘り懐かし　吾らの友情
Ob jung oder alt Trifft man sich wieder Bronzner Hachiko　誰も彼も　会うのは　ハチ公像の前
Unter Kirschblüten Eine Schale Tee teilen am Mainufer　マイン川　お茶を分けあう　花見かな
Kranich gefaltet Mit seinem Flug uns vereint Ein Strum aus Papier　折り鶴の　飛び立つ風が　我らを結ぶ
Der Duft des Reises Vertraute Wärme im Herz Wie alte Freundschaft　ご飯の匂い　旧友の心のごとく　温かい
Dorayaki-Duft Kindheitsfreunde vor Augen Wohlige Wärme
どら焼きの匂い　幼き頃が目に浮かぶ　みんなみんな優しかった
Hundertsechzig Kerzen Eine Feier ohne Freude Scheiß Corona!　160 の灯る蝋燭　賑やかな祝叶わず　悔しいコロナ
Freundschaftspflege nur online Ich esse mein Bento Alleine im Park
友との付き合いはオンライン　お弁当を食べる　一人公園で

Immer das Gute zu sehen und niemals aufgeben – genau das bin ich auch:
Eine Familie aus Berlin begeistert sich für Japan und seine Popkultur

Kirsten Hoheisel, Vorstandsmitglied der DJG

Immer, wenn ich ehrenamtlich mit Kindern ab der 4. Klasse Manga-Figuren zeichne, sind wir uns alle einig: Manga – das ist schon etwas Besonderes. Als ich Jasmin über die Schulter schaue, staune ich nicht schlecht. Mit talentierter Hand zeichnet sie Manga-Figuren, die sie sich ausgedacht hat. Neugierig geworden spreche ich ihre Eltern an und erfahre Erstaunliches. Alle Familienmitglieder sind Fans der japanischen Popkultur. Papa Stephan (36 Jahre) hat schon als Kind Serien wie „Captain Tsubasa“ geschaut. Mama Anja (32 Jahre) sah seit 1998 „Sailor Moon“. Bald vergrößerte sich die kleine Familie mit den Töchtern Luna (11 Jahre) und Jasmin (9 Jahre).

Anja ist durch ihre Freundin zum Cosplay gekommen. Dabei verkörpert sie gern ihren Lieblingscharakter Sailor Moon. „Warum gerade diesen?“, frage ich sie. „Sailor Moon ist eine Heulsuse, aber sie schafft es auch immer, das Gute zu sehen und niemals aufzugeben und genau das bin ich auch“, erklärt mir Anja. Doch auch Stephan ist ein Cosplayer. Ninja von Naruto oder Geralt von Riva sind Charaktere, die er beim Cosplay besonders mag. „Unsere Kinder sind damit groß geworden“, sagt Anja. Zum Beispiel mit Filmen wie „Mein Nachbar Totoro“. Zum Schluss frage ich Anja und Stephan noch, was sie ganz allgemein an Japan interessiert. Stephan findet das Thema Samurai und japanische Geschichte spannend. Außerdem findet er den respektvollen Umgang miteinander gut. Anja sagt: „Die japanische Kultur ist überwältigend. Das Kirschblütenfest soll sehr schön sein. Ich würde dort erstmal eine Nudelsuppe essen.“ So viel Begeisterung ist einfach ansteckend. Ich wünsche dieser netten Berliner Familie von ganzem Herzen, dass sie eines Tages Japan erleben kann und sich ihre vielen positiven Erwartungen erfüllen werden.



いつも前向きで絶対にあきらめない―まさに私がそうであるように：
ベルリンの一家は日本と日本のポップカルチャーに夢中

キルステン・ホーアイゼル（ベルリン独日協会理事）

ボランティアで 4 年生以上の子どもたちと一緒に漫画を描くたびに、私たちは皆「漫画って特別なものだ」という気持ちになります。肩越しにヤスミンを見て驚いてしまいます。想像した人物像を、才能豊かに描いているのです。好奇心がわいて、彼女の両親に話しかけてみると驚くべきことがわかりました。家族の全員が日本のポップカルチャーのファンなのです。パパのシュテファン（36 歳）は、子どもの時から「キャプテン翼」などの連続アニメを、ママのアニャ（32 歳）は 1998 年から「セーラームーン」を観ていました。ルナ（11 歳）とヤスミン（9 歳）という二人の娘によって、家族は大きくなりました。

アニャは友人に誘われてコスプレをするようになり、大好きな「セーラームーン」に扮するのが好きです。「なぜそれを？」と聞くと、「セーラームーンは泣き虫だけど、いつも前向きで絶対にあきらめない、まさに私がそう。」とアニャは教えてくれました。シュテファンもコスプレイヤーで、特に好んで扮するのはナルトの忍者や「リヴィアのゲラルト」※です。「子どもたちもポップカルチャーと共に育ったのよ」とアニャは言います。例えば「となりのトトロ」などの映画を見てきたそうです。最後に、アニャとシュテファンに、日本の何に関心があるかと聞いてみました。シュテファンは侍や日本史にワクワクし、特に日本人が互いに礼儀を持って接することが良いと感じているそうです。アニャは「日本の文化には圧倒される。桜祭りは美しいでしょうね。いつか日本でおそばを食べたいです。」と言いました。日本を愛してやまないのが伝わってきます。私は、この親切なベルリンの一家がいつの日が日本に行って多くの期待を満たすことができることを、心から願っています。

※（編集部注）ポーランドの作家 Andrzej Sapkowsk による小説やゲームの主人公

シリーズ 私とドイツ File27

「私とドイツ」は日独協会の会員、関係者にご自身とドイツ・日独協会との関りについて語っていただくシリーズです。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

ドイツの都市が、文化と生活について教えてくれたこと

嶋田 吉朗（日独協会会員）

25 年前、9 歳の頃に初めての海外旅行で父と訪れた国が、ドイツだった。ハイデルベルク郊外の夕暮れの田園、霧の先に見た魔女人形、日本より美味しく感じたファンタの味など、細かな場面を今も鮮明に覚えている。父は、息子に文化的素養を身につけさせるきっかけにと、ドイツを旅行先に選んだらしい。文化や教養と結びつく古典的なドイツのイメージは、戦前世代の親や教師から教育を受けた世代では一般的なものと思われるが、我が家では明治時代にささやかな交流があった森鴎外の影響も大きく、片田舎の先祖の家を訪れた文豪が研鑽を積んでいた、遥か遠くにある知性の国という印象を、鴎外自身に重ねて抱いていた。

中高生の頃は、北杜夫の古いエッセイをよく読んでいた。教養主義が価値を持った大昔の、格好つけて下手なドイツ語を使いたがる作中の旧制高校生たちを笑いながら、哲学やクラシック音楽にも興味が湧いて、余計に古典文化のドイツ像が育っていった。そんな時代錯誤の憧れから、大学でも第二外国語として、ドイツ語を選択した。ある時、初めてドイツ人留学生と、ドイツ語で話した。辿々しかったが、英語も流暢でなかった当時、外国語で意思疎通できること自体が新鮮だった。日本に来る若いドイツ人は、ベートーベンやゲーテよりも、少年ジャンプやジブリを好む傾向にあるという当たり前の事実にも、気づいた。18-19 世紀の観念ではない、現代の現実を生きるドイツを感じながら、初めて大学の交換留学生としてハレに留学したのが 2009 年、20 歳の時だった。

旧東ドイツのハレの町はドイツ人にとっても比較的マイナーで、留学前に立ち寄ったハンブルクの人々からは「そんなところに行くの？」と心配された。確かにハレ中央駅付近の、放置された旧東独時代のビルには少し面食らったが、それもそれで面白く、何より大学を含む旧市街は一目見てとても美しいと感じた。中世から 19 世紀ごろにかけて完成した都市が、旧東独時代から再統一という激動の時代の社会的混乱を乗り越えながら、現在まで地続きになっていることを示すように、ヨーロッパらしい建物が、はるか先の教会の建つマルクト広場まで続いていた。人々が行き交い、広場で集い、小さな街が都市的な活気を醸していることに強い印象を受けた。

かつて思いを馳せた古典的文化は、やはり多くのドイツ人学生にとって古臭く縁遠いものになっていたが、時折現実と調和して現れているのを感じた。例えば、「Schumann Nacht（シューマン・ナハト）」というイベントがあった。ハレの歴史上の大看板はヘンデルだが、この年はシューマン生誕 200 年の特別イベントで、街中の様々な会場でシューマンの曲が奏でられ、安い学生チケット 1 枚で全てを回ることができた。それぞれの会場はこぢんまりとしていたが、若い観客も多くて活気があり、シューマンをあまり知らなくても、特別な雰囲気がとても楽しかった。合間にはブラウハウスでビールを引っ掛けた。200 年以上変わらぬ街並みが、一層輝いて見えた。

雪の日のハレ・マルクト広場

2009 年、ハレに着いた日に、なぜか学生寮近所の墓地にて

荘厳なオペラハウス近くの学生の溜まり場のカフェ、お城の地下を改装したクラブ、教会前の中華インビス。かつて抱いた観念上の文化のドイツは、都市を媒介とし、今の現実を生きる、生活のドイツと重なっていった。現実のドイツへの認識の深まりと並行して、ドイツをめぐる観念への認識も、学術との出会いを通じて更新されていった。ドイツの各大学に行った交換留学同期たちやハレ大学にいた若手日本人研究者たちから刺激を受けつつ、1 人の社会学者から、18-19 世紀と地続きの、あの都市の人々の雰囲気を ”bürgerlich“（市民的）と呼ぶことも教えてもらった。ドイツという国は確かにまだ文化と学術によって様々な日本人を惹きつけ続けていて、それが人生を変える大きな出会いをもたらしてくれた。

”bürgerlich“（市民的）という概念を通して自分の人生の現実に向き合うことに面白さを感じて、帰国後は大学院に進み、現代日本の地方都市のビジネスリーダーの市民生活について研究した。どうにか博士論文を終え、家業のために地元の地方都市に戻ると、街の厳しい現実に直面した。人口規模はそれほどハレと変わらないが、歴史ある旧市街の商店街は空き店舗ばかりで、人々はほとんど車で移動して郊外で過ごす。市は大型ショッピングモールを誘致する一方、所有する街なかの歴史的建造物を採算面の懸念から閉鎖したままだ。

文化は苦しい現実生活において後回しにされがちだが、この街を第二の鴎外が来訪する時、彼が好んで極度に混み合う駐車場を越え、ショッピングモールを歩くことはないだろう。現代的生活と地域文化、現実と観念とが接合するポイントを、都市に生きながら探すことは面白いし、そこに希望がある。そう思えるのは、青春と呼べる時期に、時代の荒波に耐えてアイデンティティを守ってきた東独の都市に住むことができたからかもしれない。

著者プロフィール：学校法人嶋田学園常務理事。慶應義塾大学文学部を経て、東京大学大学院人文社会研究科博士課程修了。博士（社会学）。高等学校にて、地域連携、大学連携、グローバル教育、ICT 等を担当。また、福岡県飯塚市中心商店街の広場「ヲソラホンマチ」運営などにも携わっている。

You はなぜ日本語教師に？「教える」決断のきっかけ

緒方 ユリアン

僕が「日本語教師になる」って言い出すなんて、正直思ってもみませんでした。でもそう決めてから今まで、違和感を感じたことはありません。自分にとって正しい道を歩んでいるってことなんでしょうね。

日本人の父と、ドイツ人の母の間に生まれ、ドイツ西部 NRW 州の現地校に通いながら、デュッセルドルフにある日本語補習校に 12 年半ほど在籍していました。日本人からはしばしば「日本語上手ですね」と言われますが、日本語を母語として自然に習得した僕にとっては、褒め言葉として捉えられないのが本音です。結局、日本語が流暢な外国人としてのレッテルを貼られ、見た目と日本語力が一致していないことを自覚して認めざるを得ません。少々個人的な不満をこぼしたところで、本稿の本題に移ります。「日本語教師を目指したきっかけ」とは？

人生のほとんどをドイツで過ごしながらも、日本語を母語として扱える僕は、ずっとそれを長所・武器として捉えてきました。学生時代は、日本語を活かした通訳や翻訳の仕事を頼まれることが多く、大学生活を送ったケルンにある、国際交流基金ケルン日本文化会館で働いたこともあります。それがきっかけで、大学で専攻していたスペイン語を磨くために南米チリの日系人協会でインターンをすることに決めました。その日系人協会の活動の一つが、現地のチリ人と日系人のための日本語教室だったのですが、そこで初めて日本語教育と関わりを持ちました。その時は教え方のノウハウなんて全く知りませんでしたし、いつか僕が「日本語教師になる」って言い出すなんて、思ってもみませんでした。

それから大学を卒業する時期が近づくにつれて、僕の中で不安な気持ちが押し寄せてきました。それは「通訳翻訳を活かせる専門分野がないと、言葉が話せても意味がない」というものでした。正直、日本語を流暢に話す学習者は大勢いる訳で、「このままではヤバイ」と焦りが生じたんですよね。なんとか自分の中で価値を見出そうと必死になりました。何かしらのスキルを手に入れたいと模索して、辿り着いた答えが「教える」ということでした。そのアイディアを行動に移して、オンラインで日本語を教え始めてみました。その結果、9 ヶ月ほどやってみた間に、さすがに文法にまつわる知識も、教材も、手順も何も分からないままだと、学習者たちにとっても申し訳ないという考えが生まれました。

それから大学を卒業して日本に移住し、日本でやりたいことの一つであった日本語教師養成講座に通い始

Nach Selbstreflexion: "Warum nicht Japanisch Unterrichten?"

Julian Ogata

Warum ich mich dazu entschieden habe Japanisch-Lehrer zu werden? Damit habe ich ehrlich gesagt selber nie gerechnet. Aber es fühlt sich gar nicht mal so verkehrt an.
Mein Vater ist Japaner und ich bin zweisprachig aufgewachsen. Parallel zur Schule in Mönchengladbach, habe ich die japanische Ergänzungsschule in Düsseldorf, seit der ersten Klasse bis kurz vor meinem Abitur besucht. Zuhause Japanisch zu sprechen und zur Samstagsschule zu gehen, war das “Normalste” für mich. In der Regel bewundern mich die meisten Japaner/innen dafür, dass ich so gut die Sprache gelernt habe. Es hat sich nicht nach “Lernen” angefühlt, sondern eher, als ob es von Anfang an ein Teil von mir war, was einige Japaner/innen falsch verstehen. An dieser Stelle muss ich leider zugeben, dass man anhand meines Aussehens nicht erwarten würde, dass ich fließend Japanisch spreche. Dieser Identitätskrise werde ich wohl nicht entkommen können.
Und wie ist es nun dazu gekommen, Japanisch-Lehrer werden zu wollen?

Japanisch zu beherrschen habe ich immer als meine Kernkompetenz betrachtet. Doch an einem Punkt habe ich den Gedanken entwickelt, dass es nicht ausreicht, nur die Sprache zu sprechen.
Bis dahin war mein akademischer Werdegang eher der Geisteswissenschaft gewidmet, weswegen mir das praktische Fachwissen fehlte. Es gibt genug Japanologen, die die Sprache fließend sprechen. An diesem Punkt habe ich in mir keinen Wert sehen können. Ich habe nach Möglichkeiten gesucht, mir irgendeinen “Skill” anzueignen. Nach monatelanger Selbstreflextion kam mir dann die Idee: “Warum nicht Unterrichten?”.
Daraufhin erstellte ich mir ein Profil auf einer Online-Plattform und bot Japanisch-Unterricht an, ohne jegliche grammatikalische Kenntnisse oder Erfahrungen mit Lehrplanerstellung. Während meiner Online-Japanisch-Tutor-Zeit für circa 9 Monate ist mir dann bewusst geworden, dass, um es “richtig” zu unterrichten, eine angemessene Ausbildung unentbehrlich ist.

So habe ich mich entschlossen in Japan ab April 2022 einen einjährigen Ausbildungskurs zu besuchen, bei dem man sowohl die nötigen Fachkenntnisse, wie z.B. Grammatik, Lehr- und Lernmethoden, Spracherwerb und Phonetik usw., als auch Praxiserfahrungen sammeln kann, um Japanisch als Fremdsprache zu unterrichten. Meine Vorkenntnisse aus meinem sprachwissenschaftlichen Studium in Köln haben die Ausbildung umso interessanter gemacht, da ich den Inhalt und die Begriffe auf japanisch von einem didaktischen Blickwinkel aus auffrischen konnte.
Durch das Vergleichen zwischen Japanisch und anderen Fremdsprachen ist mir ebenfalls bewusst geworden, dass Fremdsprachenkenntnisse als Japanisch-Lehrer ein großer Vorteil sind, da es einem ermöglicht die Grammatik- und Akzentfehler der Schüler, durch den Einfluss deren Sprache, besser zu analysieren und zu korrigieren.

めました。理論と実技科目を1年間履修して、2023年3月末に修了しました。有資格者となった僕がこれから挑戦してみたいことは、いくつかあります。都内の日本語学校で経験を積んだ後、JICA青年海外協力隊に応募して、南米の日系人社会に派遣されること。日本語教育の修士課程に進むこと。日本語研修プログラムを提供する在日ドイツ企業で働くこと。いつかドイツに戻ることがあれば、日本語学科がある大学や、日本文化会館に勤めることも視野に入れています。

ここまで選択肢が広がることは、「教える」を目標にするまでは想像できませんでした。

決まった働き方がない、色々な教え方の形があるのが、日本語教師の醍醐味なのかもしれませんね。

著者プロフィール：NRW州メンヒェングラートバッハ出身。日本語教師養成講座を2023年3月に修了し、現在は東京中央日本語学院(TCJ)で留学営業と日本語教師を兼務。姉の緒方明菜さんは2012年度に協会で研修、当時は姉弟で協会活動を手伝ってくださいました。

Seit Ende März 2023 kann ich mich offiziell einen qualifizierten Japanisch-Lehrer nennen, und es steht einiges vor. Ein Traum, den ich mir erfüllen will, wäre es, im Ausland zu unterrichten - am liebsten Südamerika. Warum? Das würde den Rahmen dieses Artikels sprengen. Neben Sprachschulen in Japan, könnte ich mir auch vorstellen Japanisch in einem deutschen Unternehmen als eine Art Förderungsprogramm zu unterrichten. Wenn ich dafür einen Master dranhängen müsste, würde ich das auch in Betracht ziehen. Als ansässige Tätigkeit in Deutschland sehe ich mich als Dozent an einer Hochschule oder in einem Japanisch Kulturinstitut.
Vieles davon steht noch in den Sternen, aber ich bin gespannt, wo meine Reise hinführt.

Profil des Autors: Aufgewachsen in Mönchengladbach. Qualifizierter Japanisch-Lehrer und Auslandsstudienberater an der Tokyo Central Japanese Language School. Akina, seine Schwester, ist ehemalige Praktikantin bei der JDG.

Die Kulturkiste
＝文化の玉手箱＝

書籍紹介②

「タイパ」の時代と豊かさと
―ミヒャエル・エンデ『モモ』出版50周年に寄せて

田中 洋（杏林大学外国語学部 准教授）

ミヒャエル・エンデ（Michael Ende, 1929-1995）の『モモ』は1973年に出版された。エンデは俳優としてキャリアをスタートさせていたが、1960年代に「ジム・ボタン」シリーズをヒットさせ、その一作目と続くこの『モモ』でそれぞれドイツ児童文学賞を受賞した。86年制作の実写映画版を子供の頃に見たことがあるという方も少なくないであろう。

街外れの円形劇場跡地に住み着いているモモの元へは、老若男女問わず毎日沢山の友人・知人が相談にやってくる。彼女は真摯に耳を傾けるだけで、決してアドバイスを授けるわけではないのだが、相談した者たちはおのずと解決策を見いだす。近所の子供たちが集まってくれば、豊かな空想力で新しい遊びを創り出したりと、モモは周りにいる人たちを惹きつけてやまない存在だ。しかし、いつの頃からか周囲の人々の様子に少しずつ変化が起き始める。まずは大人たちが「時間を無駄にしてはいけない」とせかせかするようになり、子供たちも次第に巻き込まれていく。モモの良き相談相手で家族のような存在だった道路掃除夫のベッポ、そして物語ることについては誰にも負けないジジも、一分一秒を無駄にできないせかせかした人間に変貌してしまう。その背後で暗躍していたのは時間貯蓄銀行からやってきた灰色の男たちだった。モモは少し先の未来を見ることができる亀のカシオペイア、そして時を司るマイスター・ホラの助けを借り、人々の奪われた時間を取り戻す戦いに挑む。

同書の「作者のみじかいあとがき」にもある通り、この物語は過去に起こった話とも言えるし、これから起こる出来事を予見しているとも言えよう。戦後復興が進んだ70年代初頭のドイツは急速な経済成長を遂げたものの、自家用車の普及とともに深刻な環境問題に直面した。これに徹底的に対策を講じたことが、現在の環境大国ドイツの礎となっていることは周知の通りである。戦後復興の急速発展で日本も同様の道を辿り効率化・合理化を追求、そこからの反動を経て人間らしさを重んじる時代へ、そして今や再び「とことん無駄を失くす時代へ」揺り戻された感が否めない。それは「コスパ」や「タイパ」※をとかく重視する昨今の風潮からも明らかだ。児童文学と侮ることなかれ、半世紀前に発せられた警告はいまだ有効であり、本書は人間の生の豊かさを考える上で今再び読まれるべき一冊である。

※それぞれ「コストパフォーマンス」（費用対効果）と「タイムパフォーマンス」（時間対効果）の略語

日本の中の「ドイツ」を探すアプリ ― JG-Map! のご紹介

小野 竜史（日独協会会員 日独ユースネットワーク役員）

「自分の住む町でドイツ関係のお店や人とつながりたい！」、「職場の近くで同僚とドイツ料理を食べに行きたい！」、「旅行先でドイツに関係するスポットに行きたい！」、ふとした時にそう思ったことはありませんか？日独ユースネットワーク (以後、JG-Youth) が、そんなドイツ好きの皆様にぴったりの地図アプリ「JG-Map!」を開発しました。

JG-Youth は、日本全国をフィールドとして、特に若い世代の日独交流を促進する目的で 2016 年に設立された団体です。同じ目的をもってドイツで活動している独日青少年協会との協力のもと、両国から若者 50 人ほどが参加して特定のテーマについてフィールドワークや議論を進め、その成果を発表する約 10 日間の「ハロープログラム」を毎年日本とドイツで交互に開催しています。そのほか各地の日独協会とも協力しつつ、全国の会員と 45 歳以下の非会員が集まり、ドイツゆかりの場所を訪問したり、お酒や料理を片手に交流する「JG-Youth Connect」も、日本各地で毎年開催しています。下の写真①は 2018 年に東京と横浜で開催したハロープログラムの様子です。

① 2018 年に東京と横浜で開催したハロープログラムの様子

このように「ドイツと日本の若者交流」をキーワードに活動する JG-Youth では、年齢に関わらずドイツに関心のある皆様が「さらにドイツとつながる」ことを目指し、ドイツ好きによる、ドイツ好きのためのアプリ「JG-Map!」をリリースしました。スマートフォンやタブレットにアプリをダウンロードすることで、写真②のように日本国内のドイツに関わるスポットを地図で探せます。「グルメ」など特定のテーマでスポットを絞り込んで探したり、スポットをお気に入りに登録する機能もあります。スポットの数はこれからどんどん増やしていきますが、ユーザーの皆様も自分の知っているスポットを投稿することができます。スポットや JG-Youth についての色々な記事も、今後配信していく予定です。これらのアプリ機能の利用にお金はかかりません。

実際にダウンロードして使って頂いた協会職員の菊池さんと宮本さんからは、次のような感想を頂きました。ちなみに菊池さんが「うわさには聞いていた」というベルリンの壁は、横浜市で見ることができます。

②東京周辺のアプリ画面

菊池さん：*地図を動かしていくと、今まで知らなかったドイツ関連のお店や施設があることがわかり、また、うわさには聞いていたもののどこにあるか分からなかった日本の「ベルリンの壁」の場所もわかり、遠足してみよう！という気になりました。このアプリは多くの人が投稿すればするほど、実用度があがっていくと思うので、これから多くの人に使ってもらえたらよいなと思います。*

宮本さん：*これまでは、レストランやドイツゆかりの場所など、調べたいカテゴリーごとにネット検索していましたが、このアプリひとつでまとめて調べることができるので便利ですし、思いがけない発見があるのも楽しいです。ぜひたくさんの人に使ってもらって、日本地図をピンだらけにして欲しいですね。いずれは、スポットを巡る散歩イベントなども企画してみたいです。様々な可能性が感じられるアプリなので、今後の発展に期待しています！*

ここまで読んできて「JG-Map! を使ってみたい」と思った皆様､記事の最後に載っている JG-Youth ホームページのダウンロードリンクからアプリストアに飛び、ぜひダウンロードしてみてください！まだまだ出来たばかりのアプリですので、検索はもちろん、皆様のご存知のスポットをどしどし投稿頂けると大変嬉しいです。皆様のお問い合わせやご要望も踏まえ、これからどんどん進化させていく予定です。

また、ハロープログラムや JG-Youth Connect といった活動についてもっとお知りになりたい皆様も、記事の最後に載っている JG-Youth ホームページや SNS をぜひご覧ください。イベント参加はもちろん、運営スタッフとしてのご協力についてのお問い合わせも大歓迎です。ホームページのアドレスとお問い合わせ先は、アプリ内の Setting ページにも載っています。

日本にあるドイツを見つけ、紹介することで、ドイツ好きの輪をどんどん広げていきましょう！

公式 HP：https://jg-youth.net/
アプリダウンロードリンク：https://jg-youth.net/jg-map/
お問い合わせ用メールアドレス：info@jg-youth.net
公式 Facebook：https://m.facebook.com/jgyouthnetwork
公式 Instagram：https://www.instagram.com/jg_youth/

「若者はなぜドイツ語を学ぶのか」ドイツ語専攻の学友に聞く、ドイツを選んだ理由

星野圭音(日独協会学生会員　東京外国語大学１年生)

「どうしてドイツ語にしたの？」

ドイツ語を学んでいると話すと、必ず聞かれる問いである。

世界的に話者の多い仏語、西語、中国語が第二外国語として大学生から人気を集めている。その中で、ヨーロッパの一角で格変化のオンパレードを繰り広げるドイツ語を選んだのには、確かにそれなりの理由がありそうだ。

私の場合、ドイツ語との出会いはパンであった。中学生の時、偶然訪れた鎌倉のドイツパン屋でシンプルな黒パンを食べた。ふわふわの食パンとは違う、噛むほどに深まる味わいに魅了された。店主に聞いてみると、ドイツには3000種ものパンがあり、そのパン文化はユネスコ無形文化遺産に登録されているという。ドイツパンへの愛から、ドイツへの興味が深まった。自然と、ドイツ語を学ぼうと書店の参考書に手が伸びた。

今年４月、東京外国語大学に入学した。この記事のネタにもなると思い、友人たちにドイツ語に出会ったきっかけやドイツ語の魅力的な所を教えてもらった。

「好きなアニメ、『進撃の巨人』の主題歌や登場人物の名前にドイツ語が出てきて興味を持った。モデルになったと噂のネルトリンゲンにも行ってみたい！」

「サッカーが好きだから、ドイツチームの試合実況が分かるようになりたい。」

「オーストリアに興味があって、サウンドオブミュージックのロケ地などを訪れてみたいと思った。」

など、ドイツ語やドイツ語圏の文化に出会う機会はどこにでもあるようだ。

また、「印欧系の言語学に興味があり、ジョーンズの言語学が発達したドイツで文献を読みたいから。」といったアカデミックな回答もあれば、「『ゲーテ読んだことあるよ』という友人に対し、『僕は原典で読んだけど？』とマウントを張りたい。」なんて、いささか生意気な声もあった。

若者がドイツ語を学ぶ理由はまさに十人十色だが、やはりドイツ語には何かしらの引力が備わっているのだろうと思った。私が鎌倉で出会ったのがクロワッサンだったらフランス語を学んでいたのか、というとそれは少し違う気がする。

この短い記事が、読者がなぜドイツに、ドイツ語に惹かれたのかを想起し、新鮮な気持ちで改めてドイツと向き合うきっかけになれば幸いである。

引越しを機に、都内の美味しいドイツパン屋を巡るのが趣味になった。写真は吉祥寺のベッカライ・リンデのブレッツェル。

【イベント告知】「鉄道博物館でぶらドイツ」

開催日：2023年6月25日㈰

歴史的な車両が一堂に会する大宮鉄道博物館内

日本の鉄道は黎明期よりドイツからの技術導入を図りつつ発展しており、ドイツ製の車両や、ベルリン市街線を模倣した、有楽町駅から新橋駅にかけて連なる赤レンガアーチの高架橋など、現在でも多くの建造物を目にすることができます。これらは当初、ドイツから招聘されたお雇い外国人が主導し、建設から運転まで行われてきましたが、日本における技術の確立が進むにしたがい、日本人技術者のドイツへの留学による技術輸入やドイツより新技術を用いた車両を輸入し、徹底した分析を行う手法へと変化していきます。この先生と生徒のように一方的な技術供与を受ける間柄から、徐々に独立し、取捨選択を図りつつ関係を深め、現在のように互いに影響しあうまでの道のりは、まさに日独交流変遷の縮図であり、鉄道博物館の車両や模型などは、その様子を今に伝える証言者と言えるのではないでしょうか。

贅を極めた作りのドイツ製御料車、ヘンシェル社の銘板を掲げた機関車、流線型車両など、おしゃべりな展示物に耳を傾けつつ、日独交流の移り変わりを紹介したく思います。日本とドイツの鉄の道で繰り広げられた物語を鉄道博物館でぶらドイツ、皆様のご参加をお待ちしております。

久保 健（オーガナイザー　日独協会会員）

※集合場所、会費等の詳細は本誌に同封している催物案内もしくは協会ウェブサイトでご確認ください。

ドイツ経済の動き 第81回
2030年までに再生可能エネルギー80%へ

伊崎 捷治（当協会理事　元ベルリン日独協会副会長　当協会ドイツ時事問題研究会世話人）

➢➢➢ 気候保護と輸入依存からの脱却

ドイツは電力消費に占める再生可能エネルギーの割合を2030年までに80%に引き上げる計画です。この目標は2021年11月に成立した現政権が連立協定で合意し、昨年4月に再確認した後、2023年可能エネルギー法（EEG）という法律に明記されました。大変意欲的な目標ですが、原発を廃止し、脱石炭など気候保護対策を推進するドイツとしては必然的な方向だと言えます。それに拍車をかけたのが、昨年2月のロシアによるウクライナ侵攻でした。ロシアからの天然ガスの供給が最終的には完全に停止し、ドイツではガスはもとより電力、暖房油などの価格が高騰し、暖房のない冬の到来も懸念される「エネルギー危機」に陥りました。このため、政府は輸入に依存しないエネルギーとして再生可能エネルギーの拡大を国民全体の優先課題に位置付けて推進することにしました。

➢➢➢ 動員される拡大手段

ドイツでは2022年の電力消費に占める再生可能エネルギーの割合は46.2%と、すでに半分近くを占めています。しかし、今後は電気自動車の普及や暖房の電力化などによって電力消費量の増加が見込まれ、2030年までに約40%拡大するとみられています。このため、再生可能エネルギーによる発電量は現在の約2.5倍の600テラワット・アワーに拡大する必要があるとされ、再生可能エネルギー法ではそれぞれ現在に比べて陸上風力発電を約2倍、太陽光発電を約3倍に拡大し、別の法律で洋上風力発電を約4倍に拡大する目標が設定されています。

こうした大きな目標を達成する手段は上の2つの法律のほか多数の法律で定められています。手段は広範にわたりますが、わかりやすいもののひとつは発電された電力の買取価格の引き上げです。屋根上の小型ソーラー発電の場合、キロワットアワーあたり6.23セントから最大8.6セントに40%近く引き上げられました。エネルギー危機で住宅の所有者だけでなく企業の関心も高まっていて、屋根上ソーラーは将来的に太陽光発電の半分を占めるとみられています。大型の露地ソーラー、陸上・洋上風力の買取価格は基本的に入札で決まりますが、応札価格の上限が引き上げられます。

新たに設置するスペースも必要になります。ソーラー発電はこれまで利用できなかった土地にも設置できるようになり、陸上風力は国土面積の0.5%を利用していますが、各州は今後2%まで利用可能にするよう義務付けられました。周辺住民に受け入れられやすいよう、住民や市町村の事業参加には優遇措置も適用されます。洋上発電については開発地域が拡張され、北海について周辺9か国と協調して全体の発電能力を現在の30ギガワットから2030年までに4倍の120ギガワット（およそ原発80基相当）に拡大することで合意しています。こうした風力・太陽光の拡充に際しては送電網の拡充も並行して進める計画です。

自然エネルギーの拡大とともに余剰電力を利用する水素技術の開発も重視されていますが、実際の製造の多くは条件の良いオーストラリアほかアフリカの途上国との協力で行うことが計画されています。

➢➢➢ 課題の認可手続きの迅速化

送電網の拡充を含む国内での自然エネルギー拡大で共通して重視されるのがこれまで最大のネックとなっていた諸手続きの簡素化、迅速化です。ドイツは土地利用や建設、環境保護などにかかわる規制や認可手続きが厳格に定められていて、現状では陸上風力発電の例ですが、設置のために鑑定書などを含めて1,000~1,500ページの書類を提出し, 認可を得るまでに数年を要するのは決して稀ではないといわれます。再生可能エネルギーの拡大が順調に進むかどうかはこの点にも大きくかかっているといえます。

以上、主に再生可能エネルギーの拡大について述べましたが、一方でエネルギー消費の削減や化石燃料からの転換も重要な課題で、対策が進められています。

ドイツが、人材の確保やロジスティックス体制の整備など問題を克服しながら「時代の転換」をどう乗り越えていくか、今後も注目されます。

Holundersirup

相澤 凌平（日独協会学生会員）

2022年3月、私は半年のドイツ滞在を終えて帰国のため、買い集めたドイツの品々を2箱、箱詰めして日本に送る準備をしていた。2箱ときいて、いろいろな物を買い集めたのだと思われるかもしれないがそうではない。その内訳の約6割は大量に集めたHolunderblütensirupのボトルだったからだ。Holundersirupは、その名の通りホルンダー（英：Elder Flower）という花をシロップに漬けて香りを移したシロップで、白ワインと混ぜたり、炭酸で割って飲むのが伝統的だ。日本ではおばあちゃんの梅シロップのようなイメージだろうか。これがもう、すこぶる美味しかったのである。疑うことなく銀河で最も美味しい液体である。

飲み比べたシロップたち

初めて飲んだのはミュンヘンの酒場だった。後学のため知らない名前の食べ物を注文しようと頼んだのが始まりだった。飲んだ瞬間は忘れられない。会話中に一口飲んで、その美味しさに元の話題を忘れて美味しさの賞賛を始めてしまった。見ていた友人は困惑していた。そこからドルトムントに帰った私はスーパーを探しまわった。恐らく私が"Wo ist der Holundersirup?"を最も発言した日本人だ。スーパー行脚の末、ついにReweで発見したときはまさに大喜びだった。見ていた店員は戸惑っていた。おかしな日本人が買い占めて他のドイツ人に迷惑をかける訳には行かないので、毎週入荷日に6本ずつ買うことで何とか備蓄していった。見事にレジのおばさんに笑われた。

そこから最終的に22本の備蓄に成功し、無事日本に送ったのだった。実際はもっと買ったはずだがドイツ生活の中で飲みまくってしまったので消えた。

そして帰国した今、すっかり持ち帰ったシロップは飲み切ってしまったが、そのおいしさを国内に啓蒙して国産化し、日本でも購入できるようにと目論んでいるのである。手始めとして大学の指導教官にプレゼントし、研究室にHolunderの木を置く許可を取り付けた。

ここまでこの文を読んだあなたはシロップの味が気になっているはず。ご安心ください、赤坂のレストランMahlzeit（マールツァイト）で飲むことができます。ぜひご賞味あれ。そして知り合い5人以上にも同様に広めていただければ…

日本に届いた大量のシロップ

お知らせ Mitteilungen

関連団体の催物

日本ドイツ学会　第39回大会

「デジタル×ドイツ研究？」

日時：2023年6月18日(日)

会場：早稲田大学　早稲田キャンパス14号館

フォーラム：10：00～12：00

1．高等教育のユニバーサル化と大学制度改革
　—ドイツの実例を通じて

2．デモクラシーとシアトロクラシー
　—民主主義思想と演劇の関係について

3．大学の専門教育における歴史学と言語学の対話と協働
　—ドイツ語史科をどう読むか

シンポジウム：13：30～17：00

フォーラム1で佐藤勝彦理事が講師の一人として「デュアル・システムと専門大学(応用科学大学)」のタイトルでお話されます。

詳細：http://www.jgd.sakura.ne.jp/

編集後記

■評判の「安倍晋三回顧録」におけるメルケルへの評価は「知らないふり」ができる「やり手」で、八木さんの文章にある「したたか」と相通じます。緒方さんと星野さんの文章からは、言葉や文化との出会いが多くの場合偶然のように見えて、実は何らかの力が働いていることを教えられます。入国制限が緩和されて今街に溢れる外国人観光客は、コロナ前と違い、皆スマホとにらめっこしながら観光しています。この間のスマホの普及、アプリの充実に加え、SNSに投稿されて拡散・共有される情報が格段に増えたからでしょう。このように言語の壁も情報の壁も低くなった時代に、果たして若者は何をきっかけに外国語との縁を深めていくのか、興味が尽きません。（松）

■P8の「Youはなぜ日本語教師に？」を書いたのは、2013年に協会で研修をされた緒方明菜さんの弟のユリアンさん。研修初日に姉弟で事務所に現れて、その後も折に触れイベントや作業を（半ば強制的に（笑））手伝ってもらいました。その年のドイツフェスティバルに協会もブースを出し、ロウを溶かして行う占いやワークショップを行ったのですが、たくさんの参加者へのユリアンさんの温かい接し方が印象的でした。それから10年、今回の記事で彼にもバイリンガルだからこその悩みやアイデンティティへの葛藤があったことを知り、また、長い模索の末に自分らしく輝ける道を見つけられたことをうれしく思いました。きっと生徒にわかりやすく楽しく教えてくれる先生になるはず、と当時、隣で彼の占い師ぶりを見ていた私は思います。陰ながら応援しています！（菊）

次は、Die Brücke 8月号（8月1日発行予定）のお届けとなります。

Die Brücke 架け橋
日独協会機関紙「Die Brücke 架け橋」第730号　2023年6月1日発行／隔月刊
編集責任：柚岡一明（編集長）公益財団法人日独協会
jdg@jdg.or.jp ／電話：03-5368-2326 ／ FAX：03-5368-2065 ／ http://www.jdg.or.jp
住　所：〒160-0016 東京都新宿区信濃町18-39（マヤ信濃町2番館）／印刷・製本：三和印刷株式会社
禁 無断転載

HITACHI
Inspire the Next

Hitachi Social Innovation is
POWERING GOOD

ひとりの思いにこたえるインフラを、世界中へ。

地球環境を守りながら、豊かな暮らしを実現するために。
日立は、デジタルとグリーンテクノロジーで、
一人ひとりが未来への行動を選べるインフラをつくり、
サステナブルな社会をめざします。

「The Bridge 架け橋」第七三〇号 令和5年6月1日発行（隔月刊）公益財団法人 日独協会 定価一部三百円